

早稲田商学第 404 号
2005 年 6 月

書 評

広瀬義州 (著)『ビジネス・アカウンティング』 (東洋経済新報社, 2004年)

松 井 泰 則

本書は会計学の入門書である。とはいえ、「本書は、ビジネスパーソンをとおして繰り広げられる魅力的なアカウンティングの世界を描こうとしたもので、現実には遭遇する会社社会と、近くて遠いアカウンティングの世界の橋渡しをしてくれるのが本書……」という前書きにも記されるように、一般学生向けの会計学入門書とは異なり、これまでにない切り口・工夫とそして斬新なディスプレイを施した上でビジネスパーソン向けに練り上げられた書物である。

本書はこれまでの数多くの入門書とはさまざまな点で異なっており、それがそのまま本書の特徴として指摘しうると思われる。以下、こうした観点から本書の特徴をいくつか列挙してみたい。

第一は、タイトルに示されるようにその学習内容（あるいは学習対象）は、まさに「ビジネス」会計学であるという点である。これまで一般に読まれている多くの会計学入門書では、簿記と財務諸表のマスターに学習の中心がおかれていることは承知のとおりである。これに対して、「ビジネスマンにとって本当に（あるいは最低限）必要な会計学の知識とは何か」という意識の下に、会計に関する知識を積み上げ方式でかつ網羅的に紹介するのではなく、必要に応じて段階的な説明を施した上で、ビジネスにおいていくつかの重要な会計課題をピックアップしている。このことは、「ビジネスマインドと……」、「……エレメンタリー・アカウンティング」、「有価証券報告書の使い方」、「バランスシートとインカムステートメント」などといった章タイトル名称にも、単なる学生向けではなく「ビジネス界の……」という本書のスタンスが現れているといえる。

第二は、そこでピックアップされた項目のうちいくつかは、現代のビジネス界において非常に先進的な内容をもっているという点である。というのも、こうした入門書にもかかわらず、例えば第8章の「知的財産会計の考え方」に40ページも割いている点を見ても、筆者の考える現代のビジネス界での知的財産に対する認識の重要度が伝わってくる。

第三は、会計情報としては連結財務諸表を核としている点である。ほとんどの入門書では財務諸表を説明する上で財務諸表を個別・連結として別個に解説している。これに対して本書では財務諸表の仕組みやその作成を説明する上で必要な最初の数ページこそ個別財務諸表を用いて説明しているが、現実では財務諸表はそもそも連結であるという基本的立場から、入門書とはいえ連結財務諸表を中心に詳しくかつわかりやすく解説している。本書ではカラーでの図表を数多く活用することによって、いずれも複雑な会計情報の内容に関して（初学者を意識した上で）読者の理解を助けている。連結をベースにした上で数値を用いて解説するのは、会計学の入門書としては本来困難を伴うが、それを難なくクリアした上で、できるだけ現実の企業経済に即して、いやむしろ現実の企業経済が説明できなければ意味がないといった本書全体から感じられる脈絡は、学生に対する日頃の大学講義での筆者の姿勢が伝わってくるようである。

第四は、(本書の最大の特徴と思われるが)、解説の手法として、8人のビジネスパーソンを登場させ、彼らを通して、実際に彼らが遭遇する現実の会社社会と、近くて遠いアカウンティングの実態とその奥深さ、面白さを発見していこうとした物語形式をとっている点である。ストーリーを追いかけて、まずはビジネス感覚の世界に読者を突入させておいて、次に数字を確認することでそこでの計算の意味や計算表の仕組みを理解させていくという、まさにこれまでにない奇抜な会計学解説書であるといつてよいだろう。

第五は、きわめて形式的な点ではあるが、巻末の「KEYWORD」の項目も熟慮されている。いわゆる会計用語を収録した本は他にもみられるが、本書ではそれら以外にも、ビジネス・アカウンティングをマスターする上で必要とされる経営や財務に関する用語をさらに補強した「KEYWORD」を設定し、読者の実力アップに配慮していることも指摘しうるのであろう。

全体的に見て、こうした特徴をもつ本書であるが、実は第3章と第8章とを設定して

いることでさらに一層の特徴を際立たせたものとなっている。

第3章では、企業経済の現実へ一気に接近させるために、本章では上場企業を知る上で最も重要なデータである「有価証券報告書（いわゆる有報）」について、その入手の方法、その内容、そして「そこから何を読み取ったらいいのか」についてのイロハを非常にわかりやすく説明している。現実問題、ビジネスパーソンにとって「有報」は、単に会計特有のデータではなく、特定の会社を知る上での多角的な情報が豊富に記載されている最重要な情報源のひとつであることがわかる。この章を読んだだけでも、ビジネス界あるいは企業経済にどんよりとかかっていた霧に晴れ間が差し、見えてくるにつれ、より関心度も増してくるのではなかろうか。

他方、第8章では、将来の会計の方向性を予感させる知的財産会計領域を取り上げている。今後益々重要となる最新課題としての知的財産に関するこれまでのコンテンツをしっかりと取り上げ説明している本章は、本書の中で最も特徴的な章ではないだろうか。

というのも、まず以下の用語に注意してもらいたい。

インタンジブルズ、バリュードライバー、知的財産基本法、プロパテント、知的財産戦略、価値評価、差別化、ブランド価値評価モデル、特許権価値評価モデル、知的財産の証券化、知的財産信託方式証券化スキーム……

これら用語のどれをとっても、これまでの会計学入門書ではひとつとして登場してこなかったものであり、今後も登場してくると思われないものばかりである。つまり、なぜ敢えて本書で知的財産をこれほどまでに取り上げているのかといえば、ビジネスパーソンにとってこの知的財産の概念なり知識が今後非常に重要であり、したがって会計的にも理解しておかねばならない重要な課題領域であるとの考えにほかならない。特に、本書に登場する経済産業省ブランド価値評価モデルは、筆者が経済産業省企業法制研究会（ブランド価値評価研究会）において指揮を執り、作成したブランド価値評価モデルを紹介したものであって、単なる一引用モデルではない。本モデルは、これまで特許に対して法律的な観点から規定されていたものを、会計的な観点からその価値を測定しその価値評価額を算定していこうとする意欲のかつ画期的なモデルといえる。

このように本書は非常にユニークにしてかつ現代的に意義深い会計入門書であると思われる。最後になるが、『ビジネス・アカウンティング』というのであれば、こうした内容も加えて欲しかった」という趣旨の項目を敢えて3つほど加えさせていただけると

すれば、以下のような内容が考えられるのではないだろうか。

第一は、簿記は世界共通のビジネス言語であるという点をもっと強調してもよい。ここでは詳しく簿記の歴史に迫る必要はないが、少なくとも「読者諸君が勉強している、あるいはビジネスで実際に行われている簿記は、500年以上の歴史をもった世界共通の記録システムである」という認識である。

第二は、「現代の企業行動と会計」という両者の関係である。具体的には、株式市場への企業戦略と金融商品会計、リストラと退職給付会計、企業再編と M&A 会計、実際の企業におけるリース資産の活用の実態とリース会計、キャッシュ・フロー経営と減損会計…などといった最近の企業の経営行動とこれにかかわる会計の動きなど、ケース・スタディ的あるいはトピックス的であったとしても、両者のサイドからそれぞれを概観できるようなダイナミックな章立てがあれば、毎日、経済ニュースを読んでいるような読者の関心を一層ひきつけるものとなっていたに違いないと思われる。

第三は、会計の国際化である。つまり読者諸君が学習する財務諸表の作成ルールは、現在では世界共通のルールとなっているという点である。そして財務諸表が、世界のさまざまなマーケットで戦略的に活用されている実態も何らかの形で紹介されていると国際ビジネスへの学習意欲へと結びついていくにちがいない。

ビジネス・アカウンティングの世界を考察しようとする場合、その対象が現実の企業経済という広さゆえに、いかなる対象に的を絞り、それらについてどこまで、そしてどのように取り上げていくかは誠に難しい。本書はこの課題・領域に対して果敢に取り組んだ意欲作であり、今日における教育的意義はまことに大きいといえる。本書に続くような会計（ならびにビジネス）入門書が、今後、別の新たな装いで登場してくることは十分に予想される一方、密かに期待されるところでもある。